

日本気象学会

北海道支部たより

昭和37年7月

№.2

網走の近況

齊藤博英*

3月末、美幌へ講演に来たときは、北見から美幌まで見渡す限り雪系の悪路を突つ走つた記憶が、まだなまなましかつたので、それから10日後に家族を引きつれて、網走へ来た時は、きれいに雪がなくなつてゐるのに驚いた。ことしの雪消えは全く気持ちよい早わざで、野球なら、白い球がグングン伸びて、青空へ吸い込まれていくのを見ているような、胸のすく思いであつた。

これは、3月下旬の平均気温が -1.6°C であつたのに、4月上旬は 6.1°C と約8度の昇温であつたのだ。4月の気温は70年来のオズ位となりしかも、オズ位を0.9度も引き離している。

4月下旬、桜の満開予想をみると、高温、多照のため満開が5月8日となる。余り早いので、少し速慮して「10日ころ」としたが、それでも放送局から「間違いでないか？」と念を押しされた。結果はドン・ピシャだつた。

本州では梅が咲いてから、桜が咲くまでひと月もあるが北海道では桜の方が数日早い。網走の気象台の庭では、梅の花が桜より1日早く開き始めた。「網走の春は本州なみか!!」と気負ひ立つたが、近くの梅園では、桜が散つてから満開となつた。

6月中旬には、日平均気温 $17-18^{\circ}\text{C}$ の日が4

日も続いて、全くの夏であつたが、下旬には、 $9-10^{\circ}\text{C}$ の日が4日続いて、寒さにふるえた。永福も青味を失ひ、が紫。3月発表の暖候期予想が人々の胸によみがえつた。

6月29日、網走附近のク高波が、学校農業グループ幹部研修会なるものを、兼琴山で行つた。これに講師を頼まれて、高波生と共にキヤンスファイアを聞んだ。兼琴山は一面、熊の笹におおわれている。これは熊笹の半分しか青ぢはない。この笹が、ちよつと花盛りで、稔勢に穂が出ていた。同行の先生方も「笹の実るは凶作の兆」の諺を思い浮べて、話題となつた。

翌朝は、天気がいよいよ曇なのに、6時を過ぎると、黒雲が流れて来た。7時過ぎ、朝食の間に「どうも雲の感じが怪しい、台長さんいかがでしょう?」といわれ、「今日は降るはずないんだがな!」と空を見ると、赤黒く、陰分輝そうな色で、しかも雲低はかなり下つている。「おかしいな!!」とつぶやいてみると、ラジオのニュースで十勝岳の爆発を報じている。それからが大変、降灰の中を下山したが、9時ころには夜のような暗さで、電灯の光がないと、足もとが危うくなつた。灰の流れ方は、上空と下層で若干の差があるのを、始めのころに確め得た。

* 網走地方気象台

ロンドン夏の

＊
小林 復 作

ロンドンで一昨年を送り、帰つて来たら早やそれと同じ位の月日がたつて、この頃では滞英中のことをいろいろと懐かしむようになった。

7月はロンドンの一番よい季節である。公園は美しい花に彩られ、老人はベンチに終日を通し、若い人は緑の芝生にクリケットとサッカーのボールを追つて汗を流す。向うに行つて向もなく、リーグメント・パークにはばらを見に行つた折のこと、海水着にサングラスの男女が芝生一面にデジキチェアを持ち出し、陽を浴びている光景に羨望を覚かされたことがある。陰気な長い冬に耐えて生きるロンドンの人々は、こうして夏の間に、とれるだけの太陽の恵みを吸収するのである。

夏の訪れは音楽ファンにも楽しい。7月下旬から9月にかけて、ロイヤル・アルバートホールでは日曜を除く毎夜コンサートが開かれる。有名なスロムナードコンサートである。BBC交響楽団と指揮のサー・マルコム・サージエントが中心となり、曲目も古典から、シーズン中には必ず幾つかの現代ものの初演もするというように幅広い。

このホールは1871年に建てられた半球形の大きな音楽堂で収容定員5,000人、世界最大のパイプオルガンを誇っているが、音響的には余りよくない。こんなエピソードを聞いた。サージエントがごく平凡な誰かの新作を初演した後で、「二度聞いたらもう沢山だ。」と皮肉つたそうである。二度とは、自分の指揮したオーケストラからの音と、天井にいるもう一つのオーケストラ、つまり反響をとさしたのである。ウォーターレー橋の畔

にフェスティバル・ホールができ、その素晴らしい音響効果のために、演奏会の多くはこちから催されるようになったが、スロムナードコンサートはこれからも夏の宵の楽しみとして多くの人々に親しまれることであろう。

このコンサートの一癖の特色は、階下一等椅子席を全部取らつて、当日券3s. (150円)で大幅に開放することである。階下中央とステージ前面には沢山の花が飾られ非常に楽しい気分である。指揮棒が振られティンパニーかどどろき、"God Save the Queen"が奏されると、聴衆は昼過ぎから切符買いに並んだ苦労も忘れて、これからの演奏への期待と喜びに胸をふくらませるのである。私は行列したり、演奏中立ち続ける程辛く強くはなかつたので、たいてい6s.を奮発してオーケストラの後方席で眺めることにしていた。

北郊ハムステッド・ヒースの池畔でも、土曜の夜、ロンドン・フィル等の野外演奏が行われる。池を隔て森を背にしたオーケストラに対し、我々はゆるやかに傾斜した芝生に寝そべつて"田園"などを聴くのである。一度、私の下宿から地下鉄に一時向も乗つてハムステッドの駅に降りたら、激しい雨の雨上り。そのまま帰るのも残念なので、人づかいヒースを足に任せて歩いた。水気を命んだ埋つたような夕暮の空気の中の静かな森のたゞずまじは、今も残る印象深いものである。



北国のオゾン観測

石田 恭市**

オゾンが何であるかも知らないで観測に従事してから、もう2年半になります。この頃になつてようやくその取組みかたのむづかしさを感じているわけですが、仕事をしつて感じたことを述べてみます。

オゾンが大気中にむづか存在し(水銀柱に換算し0.3mm程度)、その80%以上が22km付近にあり、輻射の問題から下部成層圏の形成に重要な因子となつてゐること、そのためにIGYを契機として世界的に観測網が敷かれてゐることは、すでに公衆知のことと思ひます。日本でも現在釧野、鹿児島、南鳥島、札幌の4ヶ所で、ルーチン観測が行われており、札幌では1958年以來続けられておられます。

この観測方法は太陽からの直射光を利用するものと、天頂からの散乱光を利用するものと2種ありますが、この2つを比較すると、どうしても天頂光による観測の方が精度が悪くなり、特に積雲系の雲が天頂を通過するような場合は、10%以上も誤差を生じます。また降水現象があつた場合は原則として欠測としますが、むりに観測をしてみますと20%以上の誤差を生ずることがあります。また冬期間は天気が良くても月により粉雪が舞い上がり、このため欠測日が増加します。

オゾン量の最大による季節は、札幌では2、3月ころで、この頃の毎日の変化や、その量が特に重要視されるのですが、丁度天気の良いときあたり、このため2、3日の欠測となることがあります。

ます。オゾン量測定に要する時間はむづか5分間でその向に太陽面か天頂に雲がかからなければ、高い精度のデータが得られるのですが、丁度観測をしようとするときに雲がかかることがよくあります。それでこれを避けるために、5分ほど時向をスラして観測を始めると、最後の数分というときに雲がでてきてガツカリさせられることがあります。

ルーチン観測には、このオゾン全量のほかに反転効果を利用して垂直分布を求める反転観測があります。これはいろいろな太陽高度角のときの、雲のない天頂からの散乱光を測定するもので、このためには太陽高度の低い日の出、日の入時の屋外で夏は夕前から、冬には空の晴れた-15℃くらいの寒中に1時間以上も立つたまま観測をします。手袋をはいては観測をきず

むづか1分間の時向をむづかしんでスチームに手をのせます。そして、手がまだ暖まらないうちに次の観測となるのですから、当番の前日にすこしでも天気がよくなると、とても心配します。札幌ではこの反転観測は年間約45回くらいです。

天頂光の観測をしていて、雲が来たといつては空を見上げ、反転観測の有無を気にしながらも

オゾン観測で下部成層圏の大気の運動を求めたり、さらには大循環の様相を簡単に求めることができるようになることを、今日も夢見ながら仕事をしています。

**、札幌管区気象台

季節と長期予報

*
山崎 道夫

編集係から何か「隨筆」をとの注文であるが、全く弱線とさつぱりこれというのが浮かない。とうとう仕事のごとで紙面を活す羽目になつてしまつた。

季節というものを気象要素の変り目にとらえるといふ位に分けられることはかなり以前からわかつていた。しかしこの季節の変り目は階段的に変化し、一つの季節の間は各気象要素がほぼ一定のレベルを保つている——勿論巨視的にみて——という考えが公表されたのは10年位前であるらしく、最近道内でも季節の新しい分類や長期予報の基礎調査というような面からかなり研究されている。

私も以前からこの事実に興味をもつていたが、長期予報の仕事に携わるようになってから、予報そのものの面と利用上の面(主として農業への利用であるが)から、もう少し考えてみる必要を感じ若干手をかけている。

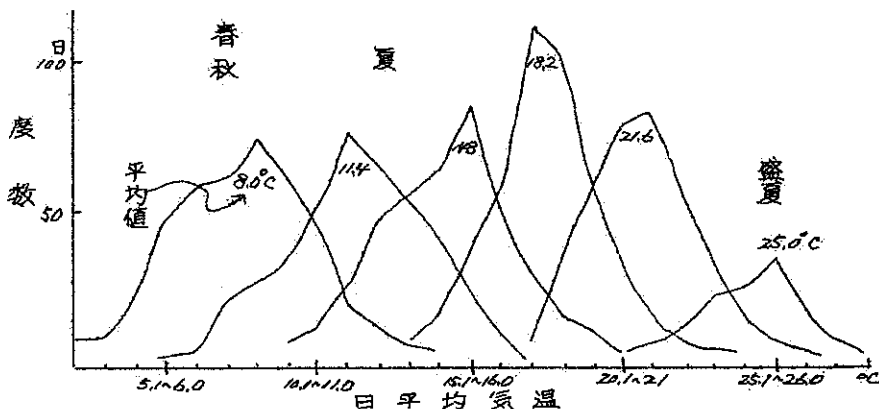
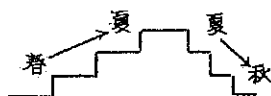
予報的に見た場合も、きり確められ、そのメカニズムもある程度明らかになつたならば、少くとも長期予報の資料はできるだけこれに沿つた整理をすることによつて現在の

の月単位の資料を用いて予報するよりは、非常に意味のあるものとなり精度の向上も期待される。勿論これは容易なことではなだらうか今

のまゝでは多くは望めない気がする。

もう一つは利用上から見た場合、ある季節に入つたことがわかれば、その季節における気象状況が大體つかめるからたとえば作物の生育状況と考へ合せてそれに依じた対策を立てることも現在よりはやりやすくなるだらうと思われる。これもいわゆる「季節はづれ」や下の図のように一つの季節でもその中でかなり「散らばり」があるから、そう簡単ではあるまいか利用しやすくなることは間違いないだらう。

試みに札幌における毎日の平均気温を分類してみると下図が得られ、気温というものは季節ごとにかなりよくまとまつている。言い換へれば階段型の変化を考へることによつて分離することができる。しかも、今までも指摘されているように春→夏と、夏→秋とがちやうど重なつて(たとえば11.4℃という季節は春にも秋にもある)いるようである。また、この統計期間は1951~1960年の10年間の観候期のみであるが、1954年や1956年のようないわゆる冷害年には25.0℃の盛夏ベースは見られない。



支部役員の改選について

現支部役員任期は本年8月31日で任期満了となりますので、日本気象学会北海道支部規約に基づき、下記要領により新役員選挙を実施いたします。

記

1. 送出する役員

理事 7名

2. 送込の方法

(1) 理事は昭和37年7月10日現在の会員の互選により定める。

(2) 選挙について、あらかじめ立候補者または推せん候補者があれば、受け付けいたしますので、昭和37年7月31日までに当支部事務所まで通知願いたい。

(3) 投票用紙には送出しようとする理事の氏名を7名まで連記し、無記名文書投票（

方法の詳細は投票用紙と共に送附予定）による。なお8名以上連記した場合は無効。

(4) 投票期日および場所は、昭和37年8月31日までに当支部事務所にお届したものに限り。

3. 用票

用票は昭和37年9月2日札幌管内気象台内にて常任理事の立合いのうえ実施します。会員はこの用票に立合うことができます。

昭和36年度事業報告

36.5.29~31 昭和36年度総会、春季大会(支部だよりNo.1で報告)

36.8.28 在札理事会

36.12.9 務に関するシンポジウム (同上)

36.12.9 講習会「天気図の見方、作り方および冬山の気象」(同上)

37.2.5 支部だよりオノ号発行

37.3.5 理事会

37.4.11 理事会

昭和36年度会計報告

収入の部		支出の部	
35年度繰越金	33,598円	理事会開催費	785
本部交付金(人当別)	17,000	通信費	165
“(入会金)	1,100	シンポジウム開催費	5,400
預金利子	1,017	事務用消耗品	855
		支部だより印刷費	2,000
		37年度繰越金	43,510
総計	52,715	総計	52,715

— 支部理事会より —

(37. 3. 5)

1. 現役員の任期満了が近いので、前回の例にならぬ改選を行おう。改選前に推薦立候補をつくる。
2. 講演会、シンポジウムのようなものを用く。それはある部類の人に興味のあるものでよい。他学会、気象協会と相互にスケジュールを交換、調整するなどしたらよい。

(37. 4. 11)

1. 幹事から別掲の36年度事業および会計報告があり承認された。

2. 37年度事業計画

- a. 懇談会 「石狩湾から侵入するしゅう雪」その他について実施したい。
 - b. 講演会 適当な講師を得たとき、札幌に多くの人が集まるとき、缶筒で話題になっているときなどの機会を利用して実施したい。
 - c. 講習会 他学会や気象協会等と連けいをとり実施することが都合われた。
3. 支部役員改選については、期日を8月30日と定めた。

会 員 動 静

個人情報保護のため公開していません

お

ね

が

い

当支部では現在会員の加入増強に力をそそいでおります。会員の皆様もどうぞ未加入者が一名でも多く加入されるように、ご協力願います。